

第26期 日本語・日本文化研修コース [上級日本語特別コース]

(2006年10月～2007年9月)

初 山 洋 介

第26期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、8カ国、16名（韓国：3名、中国：3名、インド：2名、インドネシア：2名、ウクライナ：2名、ベトナム：2名、イタリア：1名、ブルガリア：1名）であり、8名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習（10月～4月）

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』（いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「読解シート」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話（10月～4月）

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、今期から社会における様々な場における会話力（表現力、運用能力）を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

(3) 入門講義・特殊講義（10月～7月）

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして、10月～1月（前期）および4月～

7月（後期）の期間、それぞれ4つの分野の入門講義を14回（各90分）行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」であった。学生は、前期は4科目のうち2科目以上を選択、後期は4科目のうち1科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義（必修）として「音声学」（90分×5回）を行った。

(4) 作文（レポートのための基礎訓練）（1月～4月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」などについて学習した。

(5) 発展読解（10月～4月）

発展読解として、新聞などの生教材の読解、本の読解（エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択）、特別読解（学生が自分で読解の素材を用意し、学生主体で行う授業）などを行った。

(6) スピーチ（10月～7月）

自国の紹介をはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った（1人、1回、10分程度、スピーチ後に質疑応答）。

(7) レポート（1月～7月）

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとでレポートを作成した（レポートについては、「11）今後に向けて」も参照）。分量はA4、15～30枚程度である。

研究成果は『2006～2007年度日本語・日本文化研修生レポート集』(346ページ)として発行した。また、中間発表会(5月、発表:25分/質疑応答:10分)、最終発表会(7月、発表:20分/質疑応答:5分)を実施した。研究レポートの題目は以下の通りである。

1. アンタラ ガドギル(インド)「トモエ学園の特別な教育—時代を超えた教育理念—」
2. 李甲志(韓国)「ドラマを活用した日本語教育—韓国的高校における日本文化の教育—」
3. 李正範(韓国)「宮崎駿「もののけ姫」のメッセージ—「自然と文明」そして「タタラ場」—」
4. イントルチャ・キアラ(イタリア)「阿部和重『インディヴィジュアル・プロジェクション』」
5. インナ・テルジ(ウクライナ)「日本人と外来語」
6. 郭玲(中国)「中程度副詞の対照—「太」と「あまり」について—」
7. グエン トウイ ティ タイン(ベトナム)「鏡餅の魂」
8. ダニ(インドネシア)「日本人と宗教—神社と祭りを中心に—」
9. 鄭光壽(韓国)「芥川龍之介『藪の中』に見る人間の「エゴイズム」—三つの陳述を中心に—」
10. ニキール パナヤムパランビル(インド)「黒澤明の「七人の侍」—時空を超え、人々のこころに永遠に残る名作—」
11. ハブサリ バユラルダニ(インドネシア)「日本語のオノマトペと助詞「と」の関係」
12. ブー・テイ・ゴック・リン(ベトナム)「日本語の語順と焦点の解釈について」
13. ペティア・ドラギエウァ(ブルガリア)「社会背景を訳す方法—地位差と男女差をめぐって—」
14. ユルチンコ パレリヤ(ウクライナ)「若者言葉と日本—アンケート調査の結果に基づいて—」
15. 劉氷(中国)「日本語の擬人法—「季節を描写する擬人法」を中心に—」
16. 劉兵(中国)「流行語について—1997年から2006年までの流行語大賞受賞語の分析—」

(8) 総合演習(5月～7月)

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、総合演習を行った。教材は新聞や雑誌の記事や

テレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。テーマは「食について考える」「ことばで伝える、ことばで遊ぶ」「日本人とスポーツ:心技体の世界」の3つである。各テーマの実施期間は1～2週間である。

(9) その他

以上に加えて、独話練習、討論会(ディベート)、ことばのクラス(ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム)、定期的な漢字テストなども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本:異文化を通した日本理解」にも参加した。

(10) アンケート

2007年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	0人	12人	4人

(11) 今後に向けて

今期はレポート作成において大きな変化があった(あるいは、大きな変化があるはずであった)。昨期までは、学術論文に準じる執筆形式をとる「研究レポート」を必修課題としてきた。今期からは、以下の4つのカテゴリの中から学生が選択できることとした(なお、4つのカテゴリの総称として「レポート」と呼ぶ)。

1. 論文(日本人学生の卒業論文に相当するレベル)
2. 調査報告(フィールドワーク(インタビューなど)に基づく報告など)
3. 随筆・エッセイ(紀行文、旅行記など)
4. 創作(小説、詩、和歌、俳句など)

このような変更は、日本語・日本文化研修生がいろいろな意味で多様化するのにともない、各学生が将来の志望、適性、能力などに応じて、なお一層レポートに意欲的に取り組むことを願ってのことである。

さて、以上のことを学生に伝えたが、学生が希望したカテゴリは全員「論文」であった。したがって、

結果として、昨期までと今期とで実質的な変化はあまりなかったことになる。

なお、来期以降も、4つのカテゴリーから学生が選

択できるようにする予定である。したがって、指導する教員には、「論文」以外のカテゴリーについても適切に指導するための準備が求められる。